

陳舜臣さんを語る会通信

NO.81 Aug. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年8月20日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

香港を舞台にした中短編推理小説3作を収録『銘のない墓標』

本号より、順次、推理小説中短編集を紹介していきます。まず、中短編推理小説3作を収録した『銘のない墓標』（1969 講談社）です。初出は、「銘のない墓標」が『週刊朝日カラー別冊No. 2』（1969年7月）、「壁に哭く」が『オール讀物』（1967年1月号）、「にがい密」が『小説エース』（1969年9月号）です。（編集委員 橘雄三）

中公文庫版『銘のない墓標』、
「あとがきにかえて」転載
小見出し、傍線は編集委員



目次

銘のない墓標

壁に哭く

にがい密

歴史の流れ

あとがきにかえて

「銘のない墓標」百五十枚の依頼をうけ百八十枚執筆

直木賞をいただく、当分、たいそう忙しくなるのは、いまもおなじであろう。私も昭和四十三年下半期の直木賞をいただいたあと、ききしにまさる多忙な時期を迎えた。そんなときに、私は香港に四泊の旅行をした。そのころ『週刊朝日カラー別冊』という雑誌が創刊され、その二号に香港を舞台とするミステリーを書く約束をしたのである。いまからおもえば、現在流行のビジュアル大判誌のはしりの

ような雑誌であった。おそらく企画が時代を先取りしすぎたのか、たしか数号で休刊になったように記憶する。枚数は百五十枚というから、かなりの分量であり、どうしても現地取材したいとおもったのである。

私は小説のなかで、風景描写をそれほど丹念にするほうではないが、雰囲気をつかまなければペンが進まない。一九六九年現在の香港を、しばらくでもよいから、肌身にかんじてくるつもりであった。

香港、一九九七年返還を前に

当時、香港ではよく「あと三十年」といわれていた。一八九八年に結んだ九十九年租借の条約期限が、あと三十年に迫ったというのである。どのようにして中国に返還されるのか、まだ五里霧中の時期であった。三十年（じつは二十八八年）という歳月は、「まだまだ……」というかんじであったことはいふまでもない。ところが、その日は数年後に来ることになった。「銘のない墓標」

取材から二十数年たったが、歴史における歳月の流れが、実感として私の胸をうつ。小説『阿片戦争』を書きあ

げたのは、昭和四十二年のこととて、「銘のない墓標」取材に香港へ行っても、私の脳裡にはたえず阿片戦争のことがあった。戦争の発端となった事件のおこった尖沙嘴は、そのころまだ田舎のターミナルといったかんじであったが、いまは高層ビルが林立している。

香港經由↓北京直行便

中国を旅行するとき、往復とも香港經由のことが多く、しばらく私の香港通いはつづいた。だが、日中間に直行便が飛ぶようになってからは、私の取材地の関係もあり、たいてい北京へ飛び、北京から帰ることになった。

一昨年の正月、十数年ぶりに香港へ行ったが、歳月はさるにはげしく、まるで音を立てるように流れていた。そして、私は自分が書いた香港を舞台にした諸作品も、歴史の一齣（ひとまじ）としてはめこまれたという気がした。

「にがい密」「壁に哭く」

本書に収めた「にがい密」は、「銘のない墓標」の二ヶ月後に書いた。香港取材で胸のなかに燃えたものが、まだ

余熱をもっていたのである。

「壁に哭く」は、じつはほかの二作の二年も前に書かれた作品であった。二年のあいだに、私は数冊の作品集を出したが、これは収録しなかった。これも百五十枚というかなり長いもので、作品集のなかのバランスを考えたこともあるが、ほんとうは香港を舞台にした小説ばかりを、一冊にまとめてみたかったのである。またこれは『阿片戦争』と平行して書いたもので、私には忘れ難い作品となった。

三作とも書いたときは、現代小説のつもりであったが、いま読み返してみると、歴史小説のにおいが濃厚である。香港が中国に返還されたあとは、完全に歴史小説となるだろう。

一九九一年九月十日

陳舜臣



「銘のない墓標」掲載誌

中編推理小説「銘のない墓標」 キャッチコピー & おもな登場人物 ほか

「銘のない墓標」

キャッチコピー & おもな登場人物

中公文庫版 キャッチコピー

本郷の古書店に謎の文書が持ち込まれた。やがて引き起こされる殺人事件。太平洋戦争の末期、和平交渉代表と称して中国から来日、政界を揺るがした怪人物が残したという文書の背後に秘められた真実とは…。歴史のうねりに翻弄される人びとの転変と愛憎を浮び上がらせる表題作など、香港を舞台に展開する傑作ミステリー

作中時間 ■作品冒頭の「昭和三十五年六月末のある日」が作中時間

おもな登場人物

- 夏川敬吉 三十四歳、独身。私立大学に週二回出講。専攻は中国の近代史で、特に日中関係を重点的に研究
- 三浦欽次 古本屋三浦書店のあるじ。夏川と旧制中学で同級
- 三浦淑子 三浦の妹、大学三年生。中国文学を専攻、中国語ができる。兄の古書店でアルバイト
- 楊邦基 繆斌文書を、三浦書店に、買い手を探してほしいと持ち込む。同文書は、①繆斌が、昭和二十年三月に來日して小磯首相に提出した意見書―和平交渉にかんする具体策のべたもの、②自分が重慶当局の代表者にまわがないという証拠物件、及び③彼自身の手記の三点からなっていた

■繆斌(みょうひん 1897-1946) 中華民国の政治家。中国国民党の党人政治家で、後に南京国民政府に属した。刑死



■戴笠(たいりゅう 1897-1946) 中華民国の政治家・軍人(追贈で陸軍中將)。黄埔軍官学校第6期。飛行機事故で死亡



●プロフェッサー・高 七十歳近い。かつて香港大学の教授をして、日本に來たこともあつて、夏川とも面識がある。すでに大学を辞め、悠々自適の生活。夏川の香港での調査には、高教授の尽力大

●朱月雀(しゅげつじゃく) 蘇州生まれの上海育ち。香港在住。四十歳に近い。均整のとれた肢体と、輪郭の線のひきしまった美貌の持ち主。愛人の財力で高級マンションに住み赤いジャガーを乗り回す。一見、三人仲間と見える劉宝華、応晴を財力であやつる。「愛人のために生きてきたし、その人のためならなんだつてする」と言う

●M將軍 繆斌文書の中にM將軍のサインのある「便条(短い手紙)」が含まれ、また、③の手記にはM將軍の名が頻出する。いまでも台湾で健在

●廖真(りょうしん) 偽造の名人。六十歳くらい。プロフェッサー・高も二度、助けを借りたことがある。廖真には、十以上、歳のはなれた弟がいる。この弟の「仕返し」に一肌脱ぐことに。これが事件の核心をなす

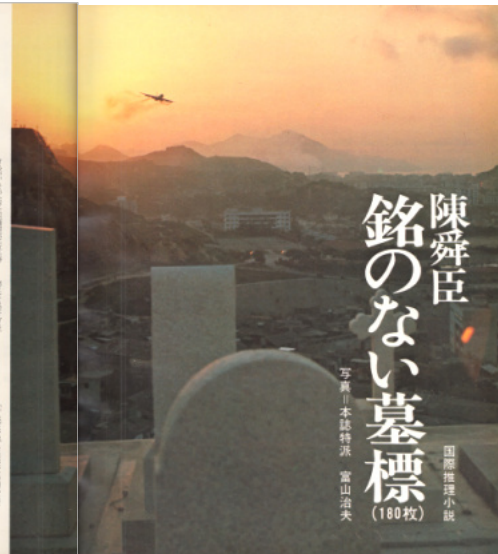
人物画像はいずれもja.wikipedia.orgより

『週刊朝日カラー別冊No.2』「銘のない墓標」掲載誌面

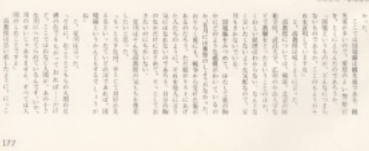
「銘のない墓標」は、一九六九年七月発行『週刊朝日カラー別冊No.2』に、全文、一挙掲載された。それも、当初依頼の一五〇枚を三〇枚超えた一八〇枚が。「枚」というのは、四〇〇字詰め原稿用紙の枚数で、掲載誌では三〇頁である。

写真画像も多い。最初の頁は夕焼けの香港で、手前は墓地、墓標である。

左の画像は、啓徳空港に着陸する旅客機。啓徳空港は私(橋)もよく利用した。買ったばかりのキャノンの一眼レフを盗まれた悪い記憶もある。当時は、



まだ返還前で、王室香港空港警察に随分お世話になった。



中編推理小説「壁に哭(な)く」 導入 & おもな登場人物 ほか

「壁に哭く」は、『銘のない墓標』収録の他の2編より2年も前に書かれた作品で、陳舜臣さんは、『阿片戦争』と並行しての執筆であったので忘れ難い、とおっしゃっています。

「壁に哭く」

導入 & おもな登場人物

導入

仕事の関係で香港にやって来た鹿村憲一が、ホテルの廊下で、背後から狙撃されるといふ事件でストーリーは始まる。怪我はなかった。狙撃される覚えのない鹿村であったが……

事件の調査にやって来た香港警察の警長徐寧基、鹿村の仕事相手の康覚明、そして鹿村自身が、部隊は違っていたが、国府軍として同じ戦場にいたことから、時間が六年前の徐州戦線に戻る。徐州戦線では、国府軍の敗色濃く、国共の争いに使命感など無い、日本人の鹿村は、たまたま乗り捨てられていたフォードを駆って戦線から離脱する。途中、十年前、長いまつげの童女に出会った白壁の豪農の屋敷前で、今度は脱走兵三人組に車を止められ、三人と財宝を香港まで運ぶ羽目になる。

作中時間■一九四八年の徐州作戦を六年前としているので、作中時間は一九五四年である。

おもな登場人物

●鹿村憲一 四十歳近い。六年前、大陸の戦場から帰国。一九三八年から一九四八年、つまり、二十二歳から三十二歳まで、所属軍隊・部隊はかわったが、大陸の戦場にいた。終戦までは日本軍人として中国と戦い、一九三八年の徐州会戦も経験した。山西省で終戦を迎える。

この地で、閻錫山將軍の軍に「留用」され、軍隊生活が続く。その後、李弥將軍の兵団に転属し、一九四八年、解放軍との戦場、徐州戦線に投入されたところから回想場面が始まる

●徐寧基(じょねいき) 香港警察警長。軍隊時代、第十八軍という国府軍のエリート軍団の中校(中佐)だった。同じ部隊にいた康覚明を脱走兵として軽蔑し、憎悪している。一方、妻の出産に対し、そんな康から借金をしている

●康覚明(こうかくめい) 四十歳近い。徳誠貿易会社社長。軍隊時代、第十八軍という国府軍のエリート軍団の少校(少佐)であったが、同僚二人と脱走。途中、豪農を襲い、主人を殺し、財を奪う。脱走兵三人組の主犯格。三人は香港に出て、康は貿易業を、張は金融業を始め、王は医院を開業。三人が共同所有する九階建ての徳誠ビルに、それぞれの会社、事務所、診療所を置く

●王群志(おうぐんし) もと軍医。第十八軍で康の同僚。脱走三人組の一人。香港で医院を開業

●張階仁(ちようかいじん) 第十八軍で康の同僚。脱走三人組の一人。香港で金融業を営む

●李昌媛(りしょうえん) 山東省の済南から遠くない田舎町の生まれ。二十三歳。十七の時、町は戦場となり、好きだった人を失う。その後、戦争から逃れ、南京へ、上海へ、そして香港へ。香港に来て、二年の間に、両親を次々亡くす。徳誠ビルで、たばこ店を営む。歳の違う康覚明と婚約している

《1. 中国と香港の国境線》

下の画像、矢印のところが国境のどぶ川(深圳川)。左が香港(「新界」の北端)、右が中国。香港側の建物は羅湖駅。ここから九龍へ行く。(1993年、深圳市側から撮影)



《2. 1997年、香港返還》

99年の租借期限が来た「新界」だけでなく、割譲されていた香港島、及び九龍も返還された。



「新界」とはNew Territoriesの訳。上図、緑色の部分(Wikipedia掲載地図に加筆)

短編推理小説「にがい密」 導入 & おもな登場人物 ほか

『銘のない墓標』に収録されているのは中短編推理小説3作と言いましたが、正確には、「銘のない墓標」は文庫版で113ページ、「壁に哭く」は115ページ、「にがい密」は63ページです。従って、ここに取り上げた「にがい密」は短篇です。陳舜臣さんご自身、「にがい密」について、次のようにおっしゃっています。

本書に収めた「にがい密」は、「銘のない墓標」の二ヶ月後に書いた。香港取材で胸のなかに燃えたものが、まだ余熱をもっていたのである。

そんなことも、頭の片隅においてお読み下さい。

「にがい密」

導入 & 人物紹介ほか

導入

斎藤誠一は、東南アジアをまわった帰り、二週間ほど滞在するつもりで香港に寄った。目的は秘密結社の調査と骨董品漁りだった。彼は、S商事の香港駐在員新山の紹介で、魅力的な女性李玲を通訳兼ガイドにし、気持ち弾む。斎藤の取材意図を汲み取った李玲のペースで話は進み、香港に今も根強く残る三合会の集会、「香堂」にもぐりこむことに。李玲は男に、斎藤は聾啞者に扮し、主香人玄道和尚のゲストとして「香堂」の場に。しかし、予期せぬ事態が：

おもな登場人物

●斎藤誠一 三十七歳、独身。大学では社会学を専攻、大学院に進み、研究室にも入ったが、束縛されるのはいやだといって教授コースは選ばなかった。父は倉庫業界の天皇といわれる人物。生活の心配がないので、定職を持たず、好きなことをしている。金と時間をふんだんに使って、ひとのやれない分野の研究を目指す

●新山 S商事の香港駐在員。斎藤とは大学で同期

●李玲(リリン) 二十三、四歳。息をのむほどの美人で、そのうえ愛嬌がある



ja.wikipedia.org より
三合会の拠点 九龍城砦

る。二年間、洋裁の勉強で日本滞在の経験があり、流ちょうな日本語を話す。洋裁の腕を生かし、家で仕事をしながら、通訳兼ガイドのアルバイトも。三年前に未亡人の母を亡くし独り身。アパート住まい

●あごひげの老人 美術商致美公司コンスの店主。鑑識眼がある

●李玲の叔父 李玲と同じアパートに住む。無類の麻雀好き

●玄道和尚 五十代半ば。坊主頭でつぶりした大柄な人物。三合会の主香人(リーダー)

■三合会 中国の秘密結社では、青幫チンバンと紅幫ホンバンが有名である。だが、彼らのおもな縄張りには揚子江流域で、根拠地は上海なのだ。華南では三合会の勢力がつかつた。かつて孫文も三合会と結んだし、太平天国も彼らと関係をもった。

■『銘のない墓標』中公文庫版P.246) 「開香堂」 三合会では集会を開くことを「開香堂」といった

香港の名所 ビクトリア・ピーク

『銘のない墓標』収録三作品に、香港の名所ビクトリア・ピークは何度も出てきます。標高552メートルで特に夜景がすばらしい。

次の文は「にがい密」、斎藤と李玲がビクトリア・ピークまでドライブするくだりです。引用します。

斎藤は香港ははじめてではない。短期間の滞在だが、もうすでに四回も立ち寄っている。五回目だから、いまさらビクトリア・ピークもないはずだ。しかし、ガイドがよいので、

ひと通りまたそんな観光地をまわった。

純粹の香港っ子なので、いろんな人を知っているから、あるいは秘密結社のこともききだせるかもしれない。李玲を紹介したとき、新山はそう言った。
(『銘のない墓標』中公文庫版P.255)

下の画像は、『週刊朝日カラー別冊No. 2』「銘のない墓標」掲載誌面より転載。写真説明は「ビクトリア・ピークからの夜景」

